

博物館に初詣！

-大坂山口神社の神像-

2月のスポット展示は、大坂山口神社に伝わる神像を展示します。

大坂山口神社は、逢坂の集落の西側、交通の要衝であった近世の伊勢街道に面しています。平安時代の貞観元(859)年の古記録に風雨祈願の記述があることから、9世紀中頃には存在していたことがうかがえます。『日本書紀』崇神9年3月の条に「大坂神に黒楯とほこ矛を祭れ」とあり、天武11年11月条には、「関を大坂山に置く」という記述があることから、創建は7世紀の天武天皇の時代にまでさかのぼります。大坂山口神社の由来を記した「明細帳」には、祭神は「おおやまづみのみこと大山祇命」、すさのおのみこと「須蓋鳴尊」、かみおおいちひめのみこと「神大市姫命」で、近世まではぎおん祇園信仰を示すこずてんのうしや牛頭天王社と称していたことがわかります。



さんげんしやながれづくり

現在の本殿は、寛永15(1638)年の創建と考えられますが、古式の桃山時代の三間社流造の建築様式を残していることから、昭和63年に奈良県指定文化財に指定されました。神社には、平安時代から鎌倉・室町・江戸時代の8種類の神像11体や狛犬8体を始め、和銅5年銘の竹製の筒に納められたみやざ「宮座文書」等が伝来しており、平成14年に香芝市指定文化財に指定されています。

■神が仏に、仏が神に、姿を表した神仏習合の神様—大坂山口神社の神像—

古来より日本の神様は、仏教寺院の本尊の仏像のように、神の姿が彫刻に表されることはありませんでした。ところが平安時代に神仏習合思想が広がると神の像が作られるようになります。

大坂山口神社には、市内の神社として唯一の神像が残されています。神代の昔からの姿(形)無き祭神に加えて、疫病が猛威をふるう鎌倉・室町時代には牛頭天王(像)をお祀りして疫 病退散を願い、江戸時代には新たにえびす恵比寿やべんざいてん弁財天等のしちふくじん七福神(像)を祭祀して各種御利益を願う。神像は、神の依代として本殿の中に祭祀されているため、参拝者が目にすることはありませんが、本殿の中から、古いものでは鎌倉時代から千年以上にわたって、逢坂に暮らす村人や街道を通る旅人達の様々な祈りや願いを受け止めていてくれたのでしょう。



い 木造男神坐像
鎌倉時代



ろ 木造女神坐像
鎌倉時代末期



は 木造神形坐像
室町時代末期



へ 木造恵比寿坐像
江戸時代



と 木造恵比寿坐像
江戸時代



ち 木造弁財天立像
江戸時代



り 木造牛頭天王立像
鎌倉時代



ぬ 木造牛頭天王立像
鎌倉時代末期

■神仏習合の神様

牛頭天王は、インドの仏教の聖地である祇園精舎を守護する「武塔天神」に由来する神様で、像の頭には牛の頭部と顔には3つの顔を持ちます。

平安時代に神仏習合の影響を受けて、神は、仏が化身として日本の地に現れた権現(仮の姿で現れた)であるとする本地垂迹という思想、素盞鳴=牛頭天王=薬師如来という信仰が生まれます。牛頭天皇像は、疫病退散を祈る祇園信仰の広まりとともに、疫病退散の神様として、各地の神社で祀られています。



る 木造天王形坐像
江戸時代



に 木造神形立像
時期不明



ほ 木造神形立像
時期不明